Column

エネルギーの源 ㉞

「エコエティカ」は、現代社会で必須の倫理学

一般社団法人 洸楓座
一般社団法人efco. jp
代表理事 佐藤 建吉

「エコエティカ」は、故・今道友信氏の遺した現在そして未来において必要な倫理学である。今道氏は、2012年10月に90歳で亡くなったが、「エコエティカ」の概念は、日本ばかりでなく海外でも広く知られている。日本では、1990年に講談社から『エコエティカ―生圏倫理学―』という書名で発行されている。その外国語訳は、5か国語に翻訳されているという。私は、そのドイツ語訳本を、2007年12月に千葉大学で開催した講演会の折に、著者の今道氏から贈呈を受け、大切にしている。

既にふれたように、「エコエティカ」は、「生圏倫理学」とも呼ばれているが、その意味は今道氏によれば、「人類の生息圏の規模で考える倫理学」であるという。そして、「エコエティカ(eco-ethica)」の「エコ」は、ギリシア語のオイコス(oikos)を音写したラテン語で、それは狭義には「家」を、広義には「生息地や生息圏」を意味するという。生圏とは、広義の意味で、私たち人類が生きる環境をいう。生圏は大きくとらえると、国土という環境、地球という環境が対象であったが、近年、あるいは未来においては、宇宙も対象とされる。「エティカ」は、もちろん「倫理学」や「倫理」を意味する。

こうして「エコエティカ」は、単純には「家と倫理学」を重ねた合成語であるが、わが家、すなわち我々が暮らす生息圏が、今日では科学技術が環境として力をもつ時代となり、古代や従来とは異なる新しい倫理学を、現代社会では必要とされる状況が背景にある。「エコエティカ」は、今道氏が、こうした観点から、アリストテレス流の個人の倫理学を超えて、社会や企業など、集団の倫理学こそが必要であると唱えた今道流の倫理学である。

繰り返しになるが、科学技術が空気のように浸透している現代社会の様相、すなわち「科学技術連関」(略して「技術連関」という)が、「エコエティカ」の概念の背景にある。科学技術は、我々の暮らしや社会を支配している。それは、我々の暮らしを便利で快適なものにする、あるいはしているとの感覚や期待が、科学技術を空気のような必須な存在に位置付けている。結果として、科学技術は、現代社会の環境として大きな役割を担う「技術連関」を創出したといえる。

科学技術は、宇宙ロケット、新幹線、ドローン、インターネット、携帯電話、8Kテレビ、自動改札、宅配時間予約、等々便利で私たちの暮らしや生き方をも変えるような大きな影響を与えている。それは、魔力のような存在であるともいえる。したがって、大きな影響をもつ存在となってしまっている現代社会の魔力に対する新しい倫理学が必要とされる。

少し倫理学的な言葉が登場するが、今道氏は、「エコエティカ」において、次の4つを最も重要な徳目としている。①勇気、②忠、③謙遜、④責任。そして今日では、次の徳目が追加、創造されている。⑤異邦人愛、⑥定刻性、⑦国際性、⑧語学と機器の習得、⑨気分転換。⑤~⑨は、大学生のような現代や未来を生きる若者に習得して欲しい徳目でもある。

さて、科学技術が大きな影響をつくりだすことは、自明である。その場合、その作り手と、その受け手に分けられる。大きな威力ある存在を設計し、製造し、運用し、管理するという担い手ができる。巨大科学技術の運用には、原子力発電所が例として挙げられる。

今道氏は、原発を「原子力と倫理の問題」と捉えている。私は、このコラム『エネルギーの源⑧』(第25号、2015年5月4日)において、「現実やその状況に対し疑義や不満を抱き、あるべき望ましい状況を意識したとき〝問題〟という言葉を発する。〝問題〟とは、現実と理想の〝ギャップ〟を意味する」と述べた。まさに今道氏も、原子力と倫理の関係において、〝ギャップ〟を感じて発言をしているのである。

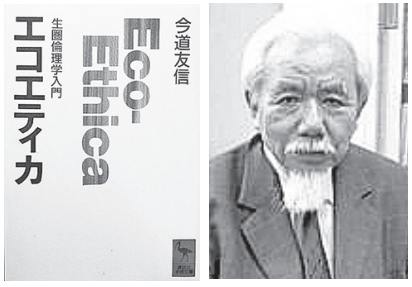
今道氏は『エコエティカ』の第四章「道徳と論理」の第6節において、「火のミュートス」というタイトル(ミュートスは神話という意味)で原子力について述べている。人類が火との関わりにおいては、いつでも悲劇が繰り返されたことを例証したのち、「原子力も、大きな電気のもとになるエネルギーでありますが、ものすごい火であります。そういう火を扱う人は、昔のままのモラルで考えていれば罰せられるということを忘れてはなりません。…(中略)…ですから、私どもは本当に、まったく新しい考え方をしなければ、原子力を使うのをやめなければならない、ということだと思います」と述べ、「すなわち、今までよりもはるかに道徳的な人間でなければ、原子力は使えないと思うのです」と記す。

また、『原子力基本法』第2条「原子力利用は、平和の目的に限り、安全の確保を旨として、民主的な運営の下に、自主的にこれを行うものとし、その成果を公開し、進んで国際協力に資するものとする」に関連し、次のように述べる。「何よりも大事なことは〝平和的利用に限る〟ということと〝安全を旨とする〟という二つの倫理的なことです。繰り返しますが、この二つは新しい時代の道徳の問題である、それはエコエティカの勉強につながるのだということを訴えたいのです。」

「原子力関係の施設の事故は続発しています。稼働性や施設数に比べて極小の事故だ、と関係者はいうのですが、しかし、大事故の可能性はあるし、小事故でも永続的致命性を周囲に及ぼします。しかも、その大部分は、天災ではなく〝人災〟と〝物災〟であります。人間が過失的な存在であるということ、人間が不完全な、そして自己弁護的存在であること、それを忘れて、不十分な構えのまま、利益まで得よう、と考えることは非道であります。…(中略)…そうだとすると、原子力関係の研究者も企業家も労働者も、道徳的意識革命を自らの課題として考え、在来の企業とはちがうイデオロギーを、在来の企業精神とはちがう理念を、哲学者との対話の中で、求めていかなくてはならないでしょう。」

以上のような見識を、今道氏は、1990年発行の本書の中で示している。

最後に、私がとくに見出した一文を記したい。「科学技術の自己規正が、人類の生き残りのために必要となり、……倫理学のような善や美という価値を求める学問でさえ、現実効果のみの技術に変質されてしまうほど、科学技術的考え方になっているのです。ただ生き残るのではなく、やはり、人間の品位をもって生き残る、つまり、よく生きることが何といっても必要です。」



『エコエティカ』、今道友信著、講談社学術文庫(1990)、800円(+Tax) ISBN4-06-158946-